

第 2 章

父親の子育て観・ 教育観・家族観

高岡 純子 (1 節)

邵 勤風 (2 節)

木村 治生 (3 節)



第1節

父親役割と子育て意識

0～6歳の子どもを持つ父親の約半数が、子どもの出産に立ち会った経験を持つ。全体的に子育てを肯定的にとらえる父親が多いが、実際には、「子どもとの時間を十分にとれない」と思う父親が多い。父親として今後不安なことは、経済的な問題が大きい。

● 出産への立ち会い

ここでは、父親の出産への立ち会いについてみてみたい。近年、妊娠中の両親学級の普及など、妊娠・出産の過程において、妻だけでなく、夫婦で参加する機会が多くみられるようになってきている。夫の出産への立ち会いについてはどうだろうか。図2-1-1は、乳幼児を持つ夫の出産への立ち会い状況をみた数値である。これによると、約半数の夫が立ち会い出産を経験している（「した」「したくなかったけれどした」の合計で47.6%）。「したかったけれどできなかった」夫は、28.2%であった。立ち会い出産に対して肯定的な夫（「した」「したかったけれどできなかった」）は、74.8%にのぼる。一方、「しよと思わなかったし、しなかった」夫は24.2%で、4人に1人の割合であった。

● 出産に立ち会う夫の特徴

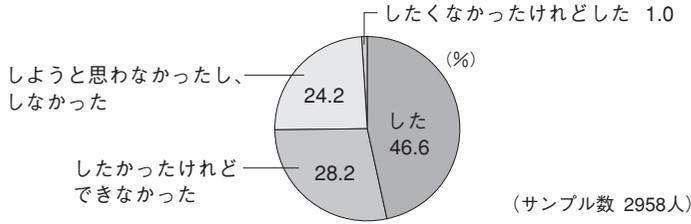
出産への立ち会いを肯定的にする夫とはどのような特徴があるのだろうか。まず、子どもの年齢別にみたものが図2-1-2である。肯定的な立ち会いの比率が最も高い年齢は、0歳児で55.1%（「した」項目のみ。「したくなかったけれどした」は除く。以下同様）で、年齢が上がるごとに立ち会う比率は減少する傾向にあり、6歳児では41.4%になる。一方「しよと思わなかったし、しなかった」比

率は、逆に年齢が上がるほど増える傾向にある（6歳児では減少）。ただし、出産に立ち会った経験は、今回の調査の対象の子どもに限っていないため、経年での変化を追うことはできない。図には示していないが、父親の年齢別で見ると、若い世代ほど肯定的に出産に立ち会う比率が高くなる傾向にある（20代50.2%、30代47.6%、40代41.7%。「した」のみの比率）。

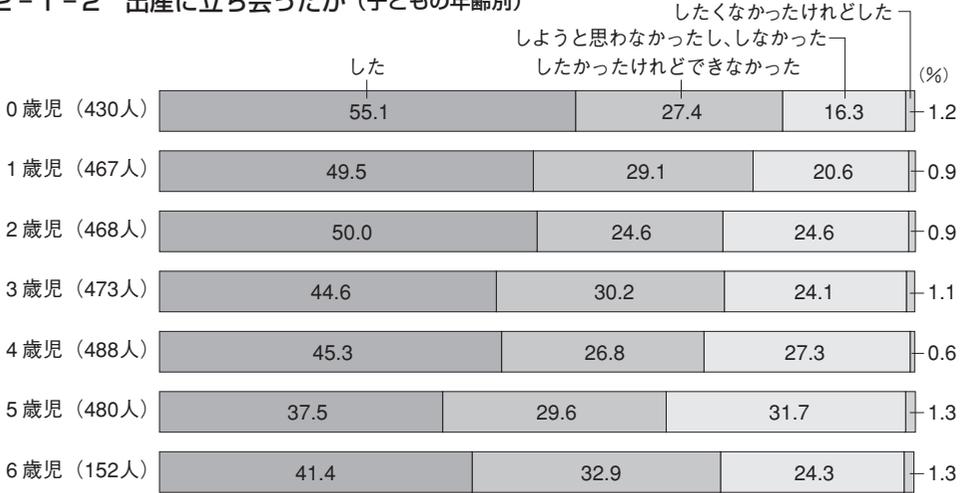
図2-1-3は、妻と夫の絆と出産への立ち会いの関係をみたものである。出産に立ち会った比率が最も高いのは「妻と自分は、互いに心の支えになっている」で「とてもあてはまる」と回答したグループである。妻との心の支えあいを強く感じている夫の約半数が出産に立ち会っている。

また、夫と妻の家事・育児の分担タイプ別（各タイプの詳細は、第1章第2節にて説明）にみると（図2-1-4）、出産に立ち会った比率が最も高いのは「夫婦共同分担タイプ」であった。逆に、出産への立ち会いを「しよと思わなかったし、しなかった」比率が高いのは、「仕事専念タイプ」であった（「家事・育児専念タイプ」は、サンプル数が非常に少ないため、分析からはずした）。家事や育児を分担している夫婦は出産への立ち会い比率が高い傾向にあり、夫は仕事中心、妻は家事・育児中心の夫婦は、出産への立ち会い比率が低い傾向であった。

■図2-1-1 出産に立ち会ったか

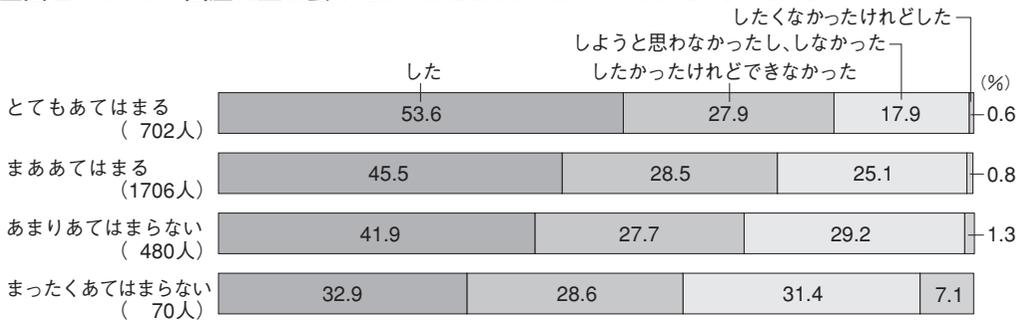


■図2-1-2 出産に立ち会ったか (子どもの年齢別)

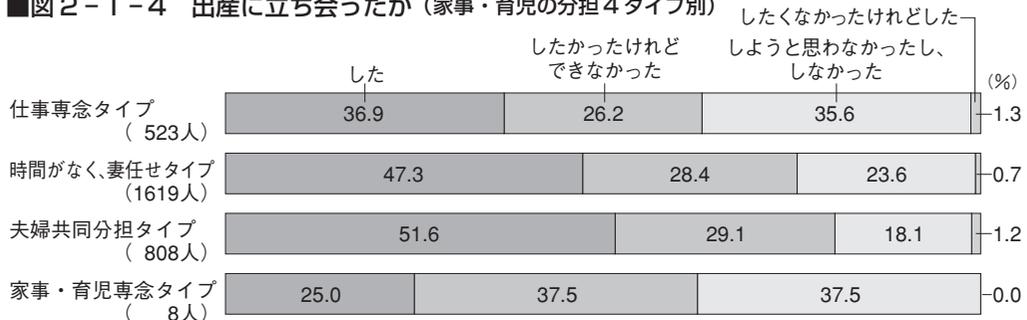


注) 今回対象となる子どもに限定せず、出産に立ち会った経験を聞いている。

■図2-1-3 出産に立ち会ったか (妻と自分は、互いに心の支えになっている)



■図2-1-4 出産に立ち会ったか (家事・育児の分担4タイプ別)



●子育て意識

図2-1-5で示したのは、父親の子育て意識に関する項目である。育児への否定的な感情を示す4項目のうち、「子どもとの時間を十分にとれない」「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配」「子どもが小さいうちは、自分のやりたいことが十分にできない」といった育児による負担感や不安感を感じる父親は、「よくある」と「ときどきある」を合わせて、6、7割を占めていることがわかる。また、「子どもとの接し方に自信がもてない」という思いは、「よくある」と「ときどきある」を合わせて4割弱と半数に満たない。

育児への肯定的な感情に関する項目については、全体的に「よくある」+「ときどきある」と答えた父親は、8、9割にのぼる。特に、「子どもがかわいくてたまらない」と答えた父親は、96.3%と高い比率である。

全体的に子育てを肯定的にとらえる父親が多いが、実際には「子どもとの時間を十分にとれない」と思う父親が多い。

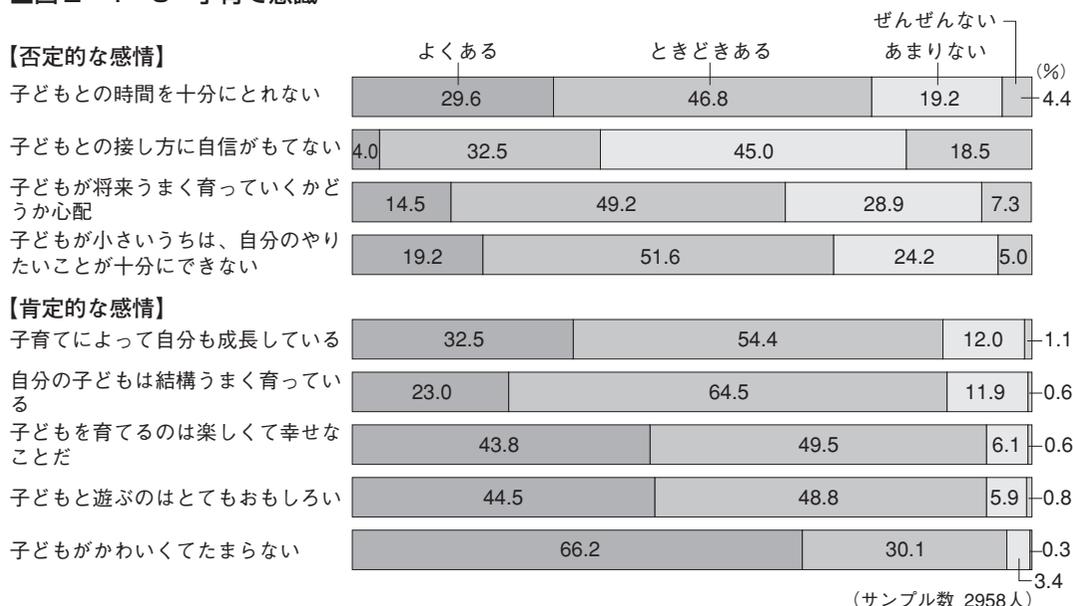
次に、子どもの年齢や就園状況によって、父親の子育て意識に違いがみられるかどうかを分析する。

●0～2歳の子どもを持つ父親の子育て意識

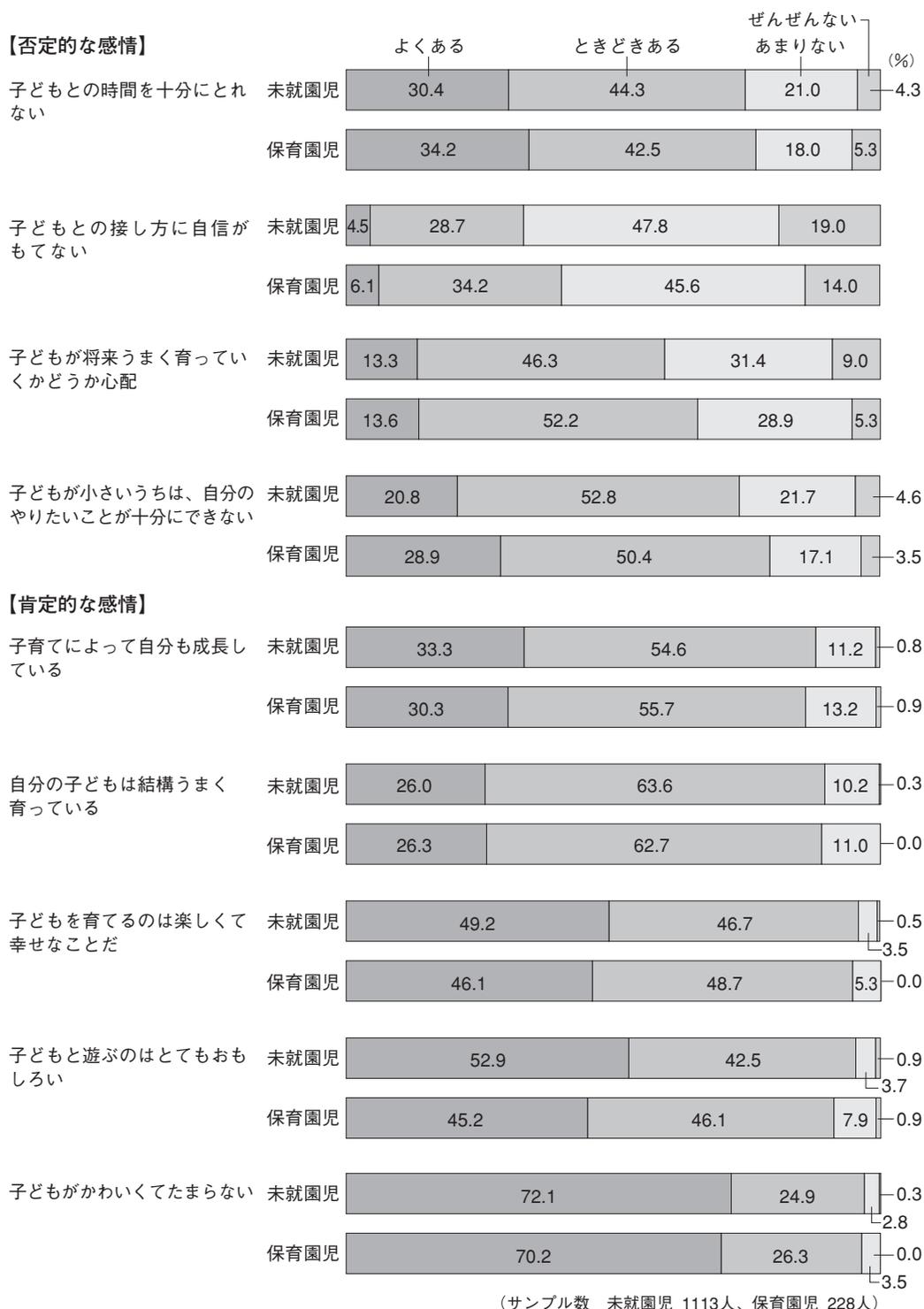
図2-1-6は、0～2歳の子どもを持つ父親の子育て意識について、就園状況との関連を示したものである。ここでは、保育園児を持つ父親と未就園児を持つ父親の比較を行った。

まず、育児の否定的な感情について、「よくある」+「ときどきある」の数値をみてみたい。保育園児の父親のほうが高い割合を示すのは、「子どもとの接し方に自信がもてない」（未就園児33.2%<保育園児40.3%、差7.1ポイント）、「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配」（未就園児59.6%<保育園児65.8%、差6.2ポイント）、「子どもが小さいうちは、自分のやりたいことが十分にできない」（未就園児73.6%<保育園児79.3%、差5.7ポイント）であった。「よくある」だけの数値

■図2-1-5 子育て意識



■図2-1-6 子育て意識（就園状況別 0～2歳）



でみると、「子どもが小さいうちは、自分のやりたいことが十分にできない」（未就園児20.8%＜保育園児28.9%、差8.1ポイント）で保育園児の父親がやや高い傾向であった。保育園児の父親は、子どもへの接し方にやや自信がなく、将来の子どもの育ちについて不安を抱いたり、自分のやりたいことが十分にできない思いを持っている傾向にあるようだ。

一方、育児への肯定的な感情については、ほとんど差はみられなかった。「よくある」だけの数値をみると、「子どもと遊ぶのはとてもおもしろい」（未就園児52.9%＞保育園児45.2%、差7.7ポイント）で、未就園児の父親がやや高い傾向にあった。

● 3～6歳の子どもを持つ父親の子育て意識

3～6歳の子どもを持つ父親の子育て意識に関して、就園状況別に比較を行ったのが図2-1-7である。

子育てに関する否定的な感情について「よくある」＋「ときどきある」の数値をみると、

「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配」で幼稚園児の父親の比率が高い傾向であった（保育園児63.4%＜幼稚園児68.5%、差5.1ポイント）。保育園児の父親のほうが高いのは、「子どもが小さいうちは、自分のやりたいことが十分にできない」（保育園児71.2%＞幼稚園児65.4%、差5.8ポイント）であった。図には出ていないが、子どもの就園ごとに、平日に子どもと過ごす時間をみると、「2時間以上」過ごす比率は、保育園児の父親のほうが幼稚園児の父親より高い（保育園児48.0%＞幼稚園児27.1%、どちらも3～6歳）。保育園児の父親の場合、子どもと過ごす時間がある程度は持っている一方で、「子どもが小さいうちは、自分のやりたいことが十分にできない」と感じることも多いようである。

育児の肯定的な感情については、ほとんど差がみられなかった。「よくある」だけの数値をみると、「子育てによって自分も成長している」（保育園児37.2%＞幼稚園児29.0%、差8.2ポイント）で、保育園児の父親のほうがやや高い傾向であった。

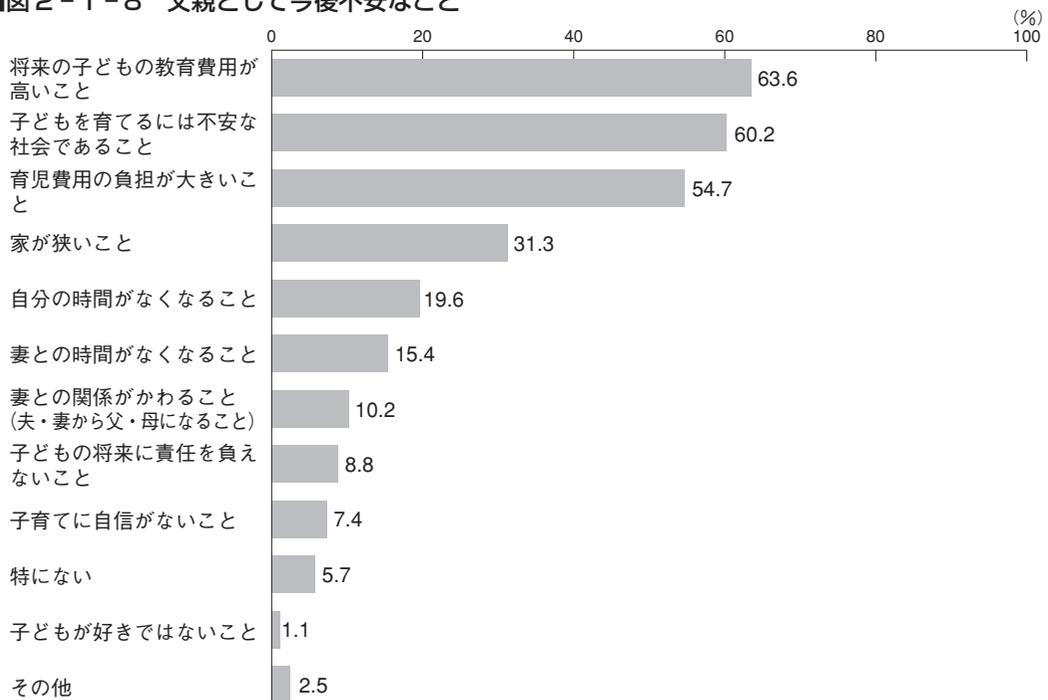
●父親として今後不安なことは、 経済的な面と社会に対する 漠然とした不安

現在の子育て意識ではなく、今後についての考えはどうだろうか。父親として今後不安なことについて聞いたのが図2-1-8である。父親として、今後不安なことのトップは、「将来の子どもの教育費用が高いこと」、次の

で「子どもを育てるには不安な社会であること」「育児費用の負担が大きいこと」「家が狭いこと」が続いている。以上のように、経済的な要因が上位の多くを占める結果となった。

これを父親の年代別にみてみよう（表2-1-1）。世代が上になるほど比率が高くなるのは、「将来の子どもの教育費用が高いこと」「家が狭いこと」「子どもを育てるには不安な社会であること」「子どもの将来に責任

■図2-1-8 父親として今後不安なこと



注) 複数回答。

(サンプル数 2958人)

■表2-1-1 父親として今後不安なこと (年代別)

	割合 (%)		
	20代(319人)	30代(1987人)	40代(652人)
育児費用の負担が大きいこと	60.5	55.7	48.9
将来の子どもの教育費用が高いこと	62.7	63.0	66.1
子どもが好きではないこと	1.9	1.1	0.8
子育てに自信がないこと	8.2	7.4	7.1
自分の時間がなくなること	24.8	20.3	15.0
妻との時間がなくなること	19.4	16.3	11.0
妻との関係がかわること (夫・妻から父・母になること)	11.3	11.0	7.1
家が狭いこと	28.2	31.5	32.4
子どもを育てるには不安な社会であること	54.9	60.5	62.0
子どもの将来に責任を負えないこと	5.3	8.5	11.5
特になし	6.0	5.9	5.1
その他	1.9	2.5	2.9

注) 複数回答。

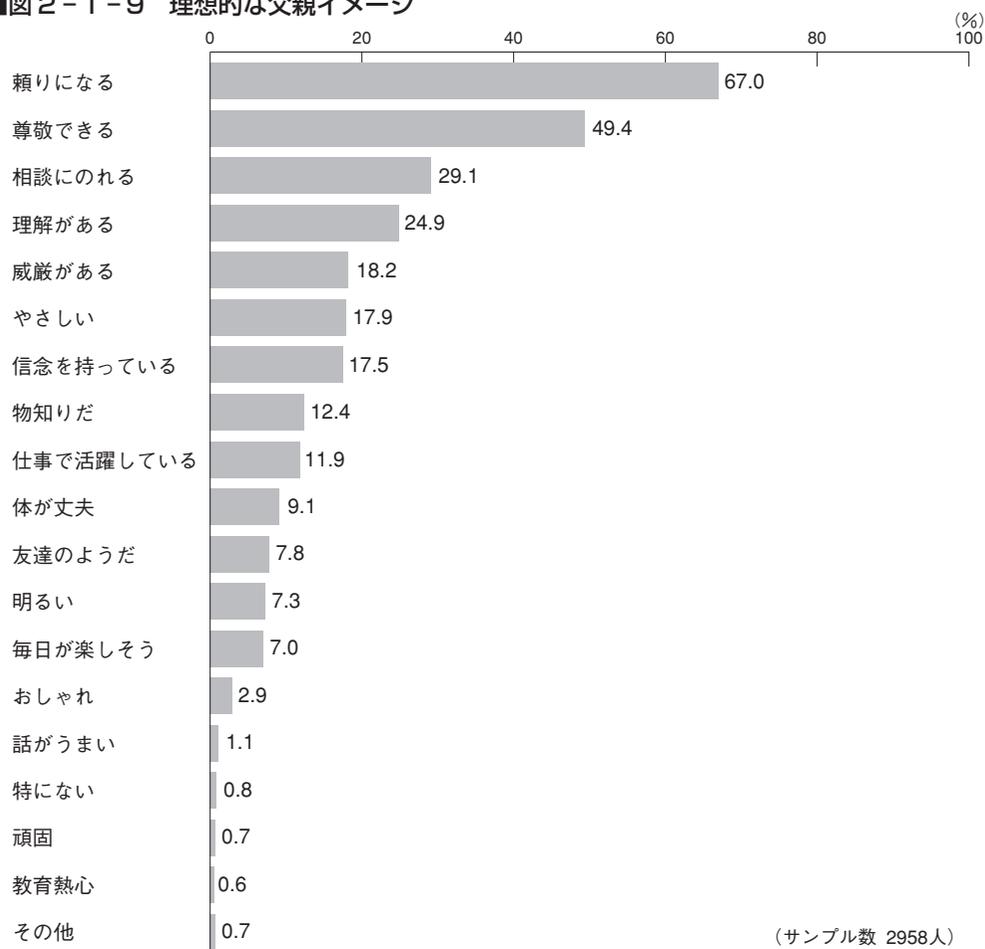
を負えないこと」である。逆に20代のほうが比率が高いのは、「育児費用の負担が大きいこと」「自分の時間がなくなること」「妻との時間がなくなること」「妻との関係がかわること（夫・妻から父・母になること）」である。子どもが成長するにつれて、経済的負担が育児から教育へシフトする様子うかがえる。また、20代の場合、子育てにかかる時間によって、自分自身や妻との時間が圧迫されることに不安を抱いている様子わかる。子育て意識の項目をみると、「子どもが小さいうちは、自分のやりたいことが十分にできない」でも同様の傾向がでており、父親の年齢が若いほうが、比率が高くなっている（20代24.8%、30代19.2%、40代16.4%、「よくある」の比率）。父親の年齢が若いと、子ども

の年齢は低い傾向にあり、手のかかる時期であるため、自分のやりたいことに関して不自由さを感じる父親が多いと思われる。

●理想的な父親イメージ

父親自身は、どのようなイメージを理想として持っているのだろうか。図2-1-9は、理想の父親イメージについてみたものである。理想的な父親イメージとして多かったのは、「頼りになる」「尊敬できる」「相談にのれる」「理解がある」などである。父親として、子どもから頼られたり、尊敬される存在であること、また子どもの相談にのり、理解できる存在であることを、父親自身は理想としているようである。

■図2-1-9 理想的な父親イメージ



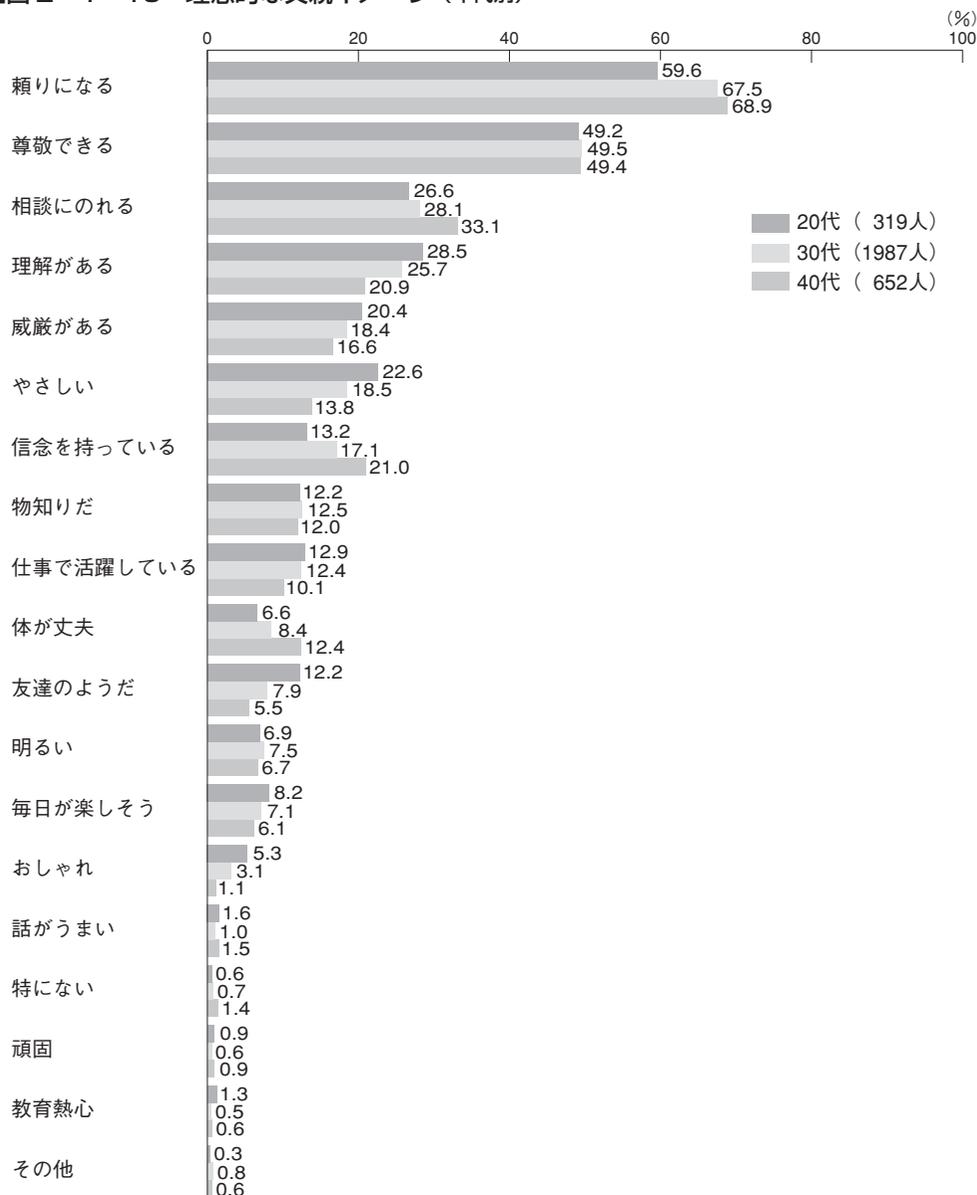
注) 複数回答 (3つまで)。

年代別に比較した場合をみると(図2-1-10)、次のような傾向がある。20代ほど高い比率であるのは「理解がある」「威厳がある」「やさしい」「友達のように」という項目である。これらの項目は、年代が上がるほど比率が下がる傾向にある。20代の父親は、子どもからみて、「友達」「やさしい」「理解がある」といったイメージを理想とする一方で、「威厳」という伝統的な父親イメージを

挙げている点が興味深い。

逆に、年代が上がるほど比率が高くなるのは「頼りになる」「相談にのれる」「信念を持っている」「体が丈夫」などである。40代では、「頼りになる」「相談にのれる」など、子どもに対して臨機応変な対応ができる父親が理想のイメージとして並んでいる点の特徴といえよう。

■図2-1-10 理想的な父親イメージ(年代別)



注) 複数回答(3つまで)。

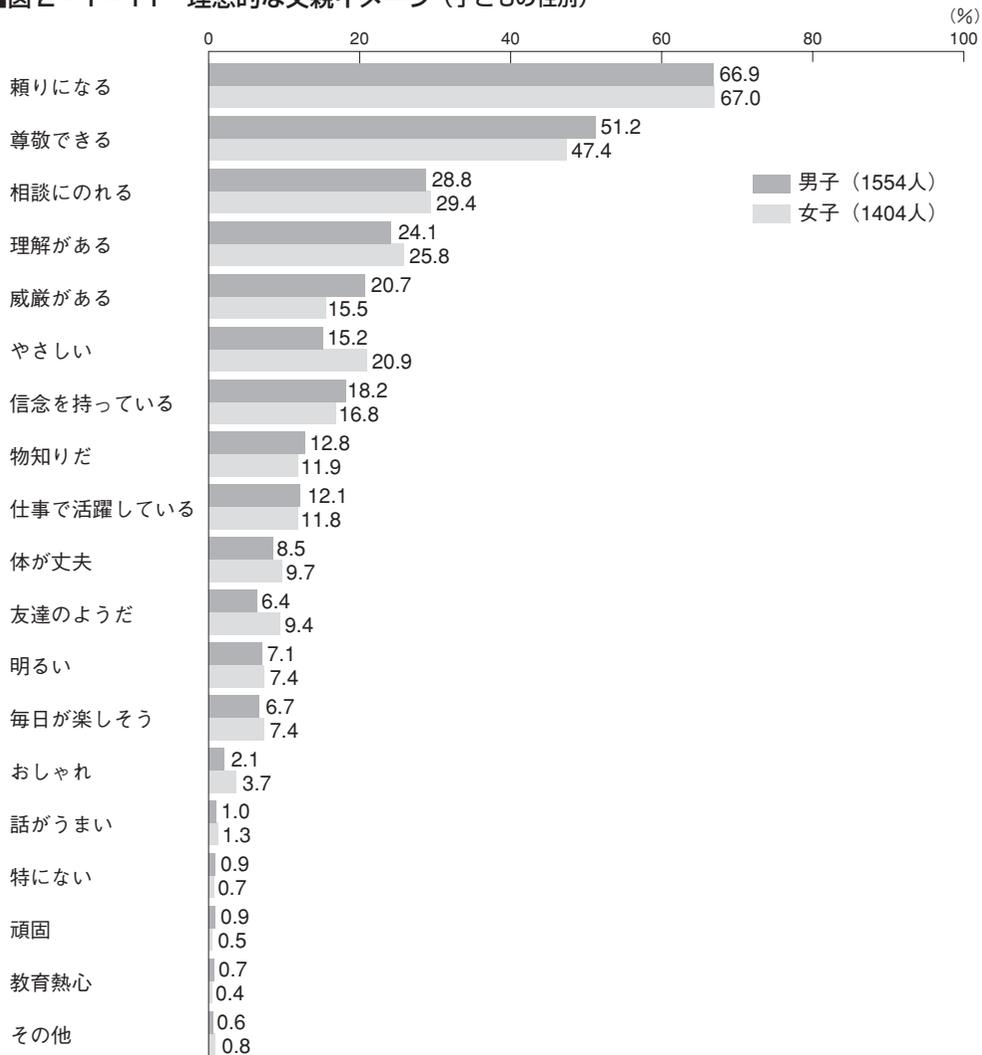
●子どもの性差による父親イメージの違い

図2-1-11は、今回の調査で回答の対象となった子どもの性別に、父親イメージをみたものである。「頼りになる」は、男子、女子ともに高い比率である。男子を持つ父親のほうがより比率の高いイメージは、「威厳がある」（差5.2ポイント）、「尊敬できる」（差3.8ポイント）である。わずかながら差のある項目として「物知りだ」「信念を持っている」が挙げられるが、その他の項目ではほぼ

同じか女子を持つ父親の比率が高い。男子の父親は、子どもからみて威厳があり、子どもから尊敬される存在を理想としている傾向が強いことがわかる。

女子を持つ父親のほうが比率が高いイメージは、「やさしい」（差5.7ポイント）、「友達のようなようだ」（差3.0ポイント）であった。女子を持つ父親の抱く理想的な父親イメージは、子どもと友達のような存在であり、子どもに対してやさしい父親というイメージを、より強く持っているようだ。

■図2-1-11 理想的な父親イメージ（子どもの性別）



注) 複数回答 (3つまで)。

第2節

父親の子育て観、
将来への期待

子育てで、文字・数の学習より人とのかかわりや興味関心を伸ばすことに力を入れたいと思っている。子どもに将来「友人を大切にする人」「自分の家族を大切にする人」「他人に迷惑をかけない人」になってほしい比率が高い。一方、「仕事で能力を発揮する人」などの比率が低いことから、子どもの将来に対して、社会的成功より人とのよい人間関係づくりを重視している父親の姿がうかがえる。また子どもへの学歴期待では、大学卒業以上の学歴を望む父親が8割弱いることがわかる。

●子育てで力を入れたいと思うこととしては、文字・数の学習より人間関係や興味関心を伸ばすことを重視

この節では、父親がどのような子育て観を持ち、子どもに将来どんな人になってほしいのかなど、父親の子育て観や教育観について分析していきたい。

まず、どんなことに力を入れて、子どもを育てたいと思うのかについてたずねてみた。その結果をグラフ化したのが図2-2-1である。

「とても力を入れたいと思う」の数値が高かった項目をみると、第1位は「他者への思いやりを持つこと」73.9%、第2位は「興味や関心を広げること」60.0%、第3位は「基本的な生活習慣を身につけること」58.9%であった。その一方で、「外国語を学ぶこと」「芸術的な才能を伸ばすこと（音楽や絵画など）」は2割弱で、「数や文字を学ぶこと」は約2割5分であった。文字・数および外国語学習より人とのかかわりや興味関心を伸ばすことに力を入れたいと思う父親の子育て観がうかがえる。

父親のこのような子育て観の特徴をつかむため、母親の調査結果（「第3回幼児の生活アンケート・国内調査」Benesse教育研究開発センター、2005年実施）を参考にみてみた

い。本調査と違って、第3回幼児の生活アンケートでは、母親に「どのようなことに力を入れて、お子様を育てていますか」と実際の行動を聞いていた。また調査方法は郵送法をとっていたため、両者の直接比較はできないこと、参考値でしかないことをまずお断りしておきたい。結果をみると、文字・数や外国語の学習より人とのかかわりを重視するという全体傾向では似ているが、母親より父親のほうが全般的に数値が高い。父親の場合、母親のように、毎日子どもと向き合っていない分、自分の思った気持ちをそのまま出せるので、比較的楽観的な数値が出ていて、まさに意識と行動の差ではないかと思われる。

●子どもへの学歴期待別による差

子どもへの学歴期待によって、力を入れたいと思うことが変わってくるのだろうか（図2-2-2）。

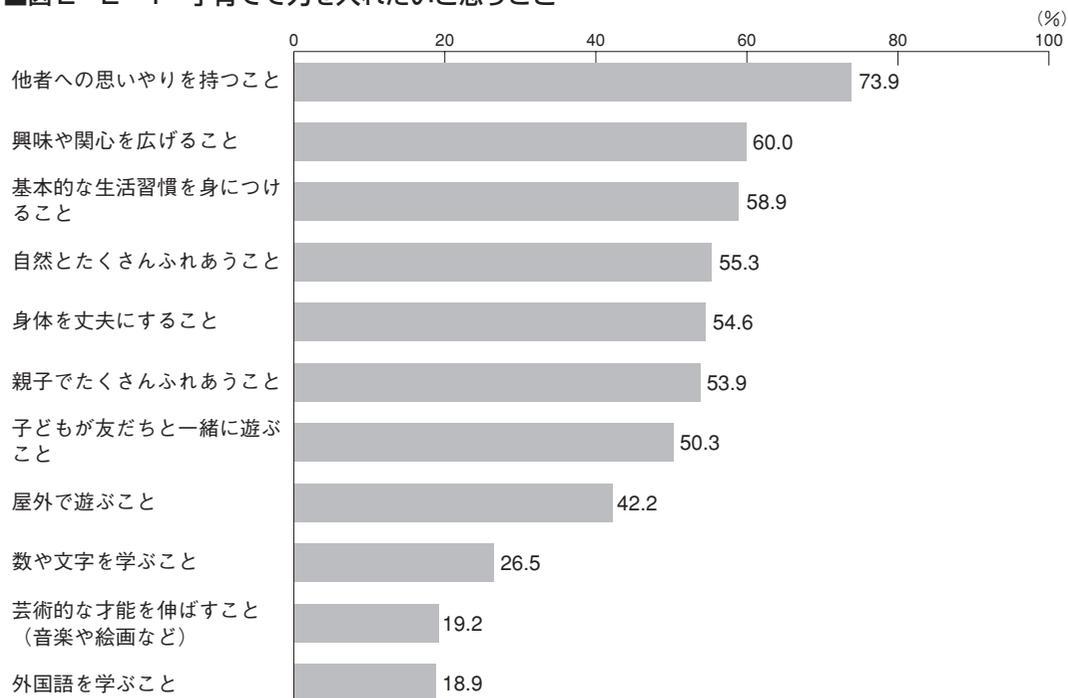
この図では、「大学卒業まで」「大学院卒業まで」の学歴を望む人を「Aグループ」とし、「中学校卒業まで」「高校卒業まで」「専門学校卒業まで」「短大卒業まで」を望む人を「Bグループ」とし、差がみられた3項目のみを並べてみた。

差がみられた3項目はどれも大学・大学院卒業を期待している父親のほうが数値が高

い。「数や文字を学ぶこと」は6.6ポイントの差、「外国語を学ぶこと」は9.3ポイントの差、「芸術的な才能を伸ばすこと（音楽や絵画など）」は3.5ポイントの差である。子どもに大

学・大学院卒業の学歴を期待している父親のほうが数や文字の学習、外国語学習、芸術的な才能を伸ばすことに力を入れたいと思う傾向がある。

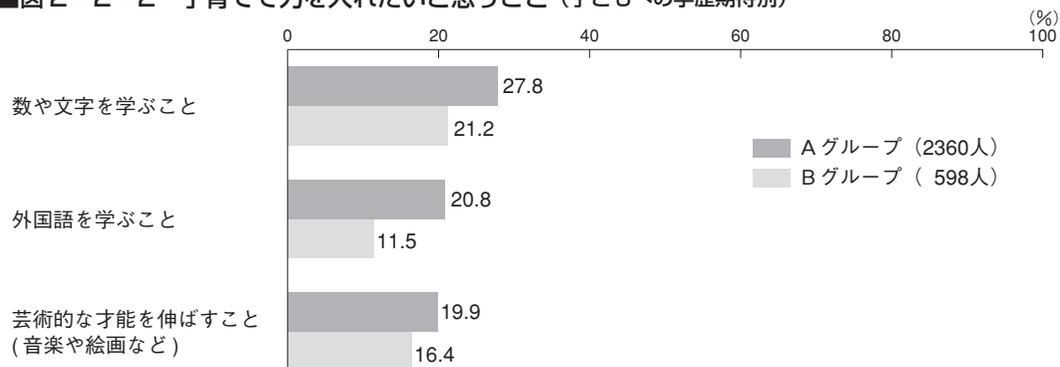
■図2-2-1 子育てで力を入れたいと思うこと



注)「とてども力を入れたいと思う」の%

(サンプル数 2958人)

■図2-2-2 子育てで力を入れたいと思うこと (子どもへの学歴期待別)



注1)「とてども力を入れたいと思う」の%。

注2) 11項目中3項目を図示。

注3)「Aグループ」は「大学卒業まで」「大学院卒業まで」の学歴を望む人、「Bグループ」は「中学校卒業まで」「高校卒業まで」「専門学校卒業まで」「短大卒業まで」の学歴を望む人を表す。

●子どもの将来に対する期待では、社会的成功より人間関係を重視

子どもに、将来どのような人になってほしいのかをたずねてみた。10項目のうち、3つまで選択してもらった。図2-2-3はその結果である。

上位3項目は、「友人を大切にする人」60.0%、「自分の家族を大切にする人」58.6%、「他人に迷惑をかけない人」56.3%となっている。一方、「まわりから尊敬される人」「自分の考えを貫き通す人」「リーダーシップのある人」は2割前後で、それ以外の4項目は1割前後となる。社会的成功より人間関係を重視する父親の姿がうかがえる。

今回の調査対象は首都圏の父親であるため、日本の父親全体にこのような特徴があるかどうかは不明だが、参考としてほかの国の父親は子どもの将来にどのような期待をかけているのかをみてみよう。ここでは、2005年3月から6月にかけて、Benesse教育研究開発センターで実施した「幼児の生活アンケート・東アジア5都市調査」の北京・上海のデータと比べてみよう。ただし、調査方法（北京・上海では幼稚園通しによる家庭での自記式質問紙調査）が異なっており、またここで紹介する北京・上海のデータについては、調査対象が3歳から6歳就学前の幼児を持つ父親のため、正確な比較はできない。図2-2-4は北京・上海の父親に子どもの将来に対する期待を聞いた結果である。

本調査の上位3項目のうち、「自分の家族を大切にする人」のみが北京・上海のベスト3にランクインされ、かつそれがトップで、67.8%である。本調査で第1位の「友人を大切にする人」は、北京・上海では18.0%で、

第8位である。本調査の第3位の「他人に迷惑をかけない人」は、北京・上海ではわずか5.1%で、最下位となっている。本調査の結果は大変日本的な考えの特徴を表しているのではないだろうか。

一方、「仕事で能力を発揮する人」については、本調査では10.1%に対して、東アジア5都市調査での北京・上海のデータをみると37.4%で、第3位となっている。

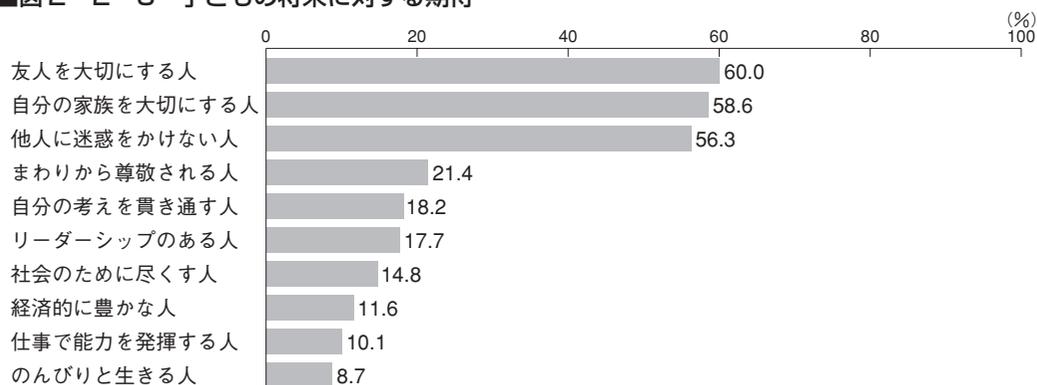
本調査の結果と、上記の東アジア5都市調査における北京・上海の父親のデータと合わせてみると、社会的成功より人とのかかわりを大切にする日本の父親像が一層浮き彫りになっているのではないだろうか。

●男子にはより社会的出世を望んでいるのに対し、女子にはよりよい人間関係づくりを望んでいる

次に、子どもの性別によって、将来に対する期待が変わってくるかどうかを分析した（図2-2-5）。

男子で数値が高かったのは「リーダーシップのある人」（男子24.0%＞女子10.8%、13.2ポイント差）、「仕事で能力を発揮する人」（男子11.9%＞女子8.1%、3.8ポイント差）である。反対に、女子で数値が高かったのは「自分の家族を大切にする人」（女子61.3%＞男子56.1%、5.2ポイント差）、「友人を大切にする人」（女子64.8%＞男子55.7%、9.1ポイント差）、「他人に迷惑をかけない人」（女子59.0%＞男子53.7%、5.3ポイント差）などである。男子には、より社会的出世、自己実現を望んでいるのに対して、女子には、より人と協調し、よい人間関係づくりを望んでいることがわかる。

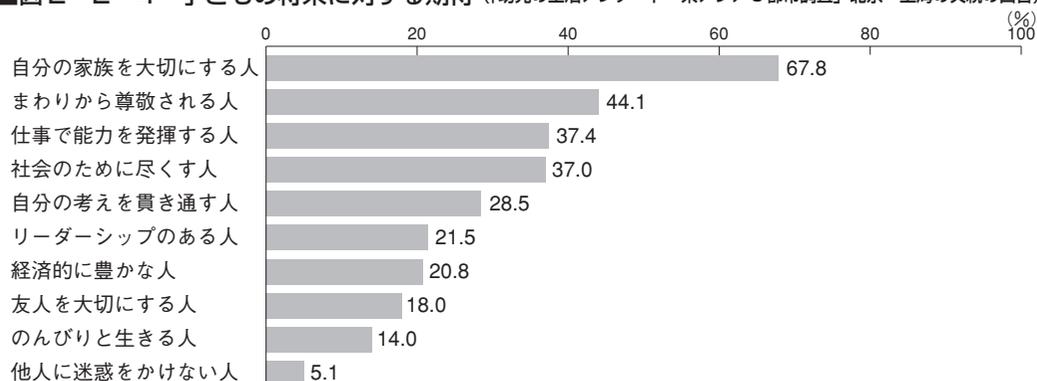
■図2-2-3 子どもの将来に対する期待



注) 複数回答 (3つまで)。

(サンプル数 2958人)

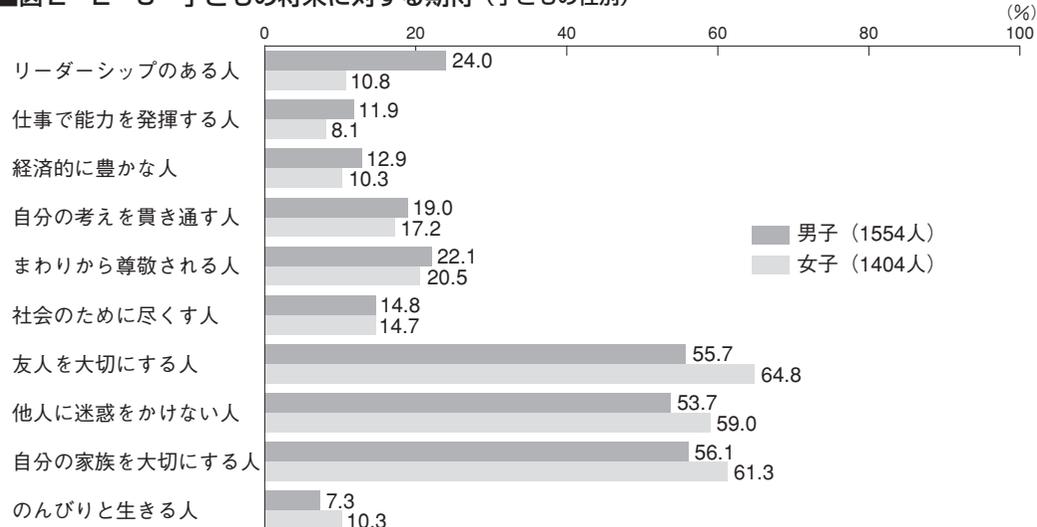
■図2-2-4 子どもの将来に対する期待 (「幼児の生活アンケート・東アジア5都市調査」北京・上海の父親の回答)



注) 複数回答 (3つまで)。

(サンプル数 374人)

■図2-2-5 子どもの将来に対する期待 (子どもの性別)



注) 複数回答 (3つまで)。

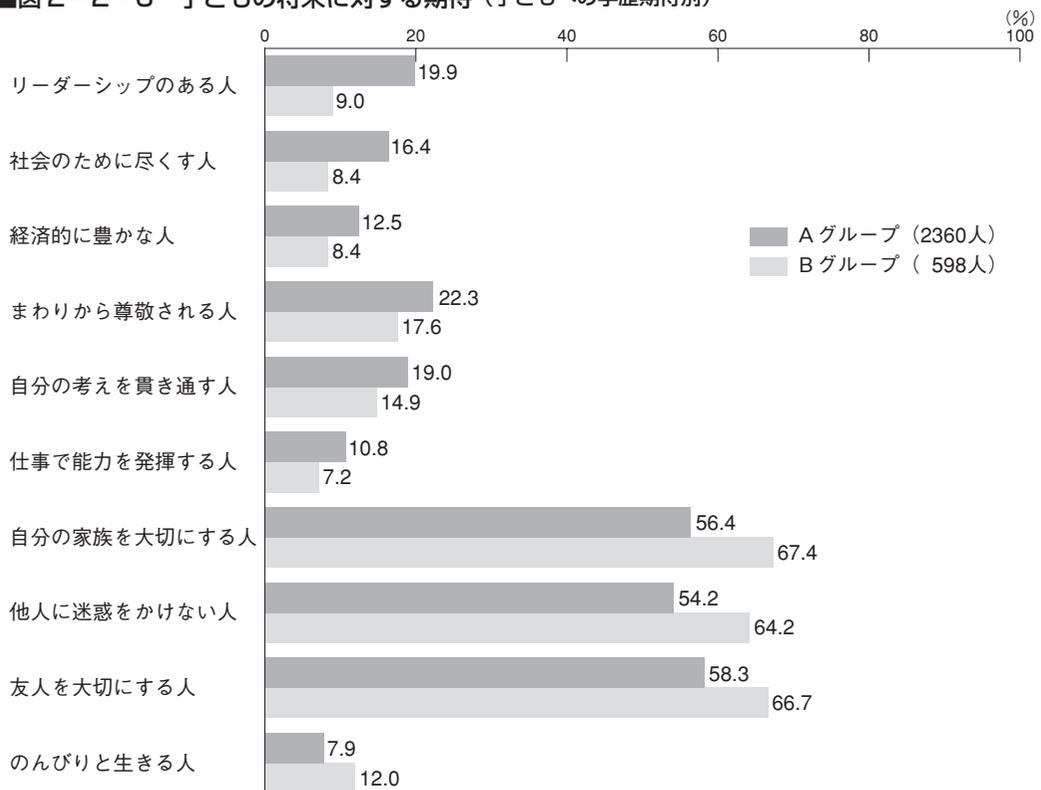
●子どもへの学歴期待別による差

子どもへの学歴期待別でみた子どもの将来に対する期待の結果は図2-2-6である。

大学・大学院卒業の学歴を望んでいる父親（図2-2-6では、「Aグループ」としている）は「リーダーシップのある人」「社会のために尽くす人」といった社会との接点を求めると思われる項目では、数値が高いのに対して、中学校・高校・専門学校・短大卒業の学歴を望んでいる父親（図2-2-6では、「Bグループ

ープ」としている）は「自分の家族を大切にしている人」「友人を大切にする人」「他人に迷惑をかけない人」といった対人関係の項目では、数値が高い。大学・大学院卒業の学歴を期待している父親は子どもに将来、社会的活躍や社会への貢献を期待している。一方、中学校・高校・専門学校・短大卒業の学歴を期待している父親は子どもに将来、人とのかかわりを重視し、家族関係を大切にすることを求める傾向が高いといえよう。

■図2-2-6 子どもの将来に対する期待（子どもへの学歴期待別）



注1) 複数回答 (3つまで)。

注2) 「Aグループ」は「大学卒業まで」「大学院卒業まで」の学歴を望む人、「Bグループ」は「中学校卒業まで」「高校卒業まで」「専門学校卒業まで」「短大卒業まで」の学歴を望む人を表す。

●子どもへの学歴期待では、約8割の父親が大学卒業以上の学歴を望んでいる

現段階で、子どもをどの程度まで進学させたいかを聞いてみた。その結果を図2-2-7に示す。「大学卒業まで」72.5%、「大学院卒業まで」7.2%と、大学卒業以上の学歴を望んでいる父親は約8割である。

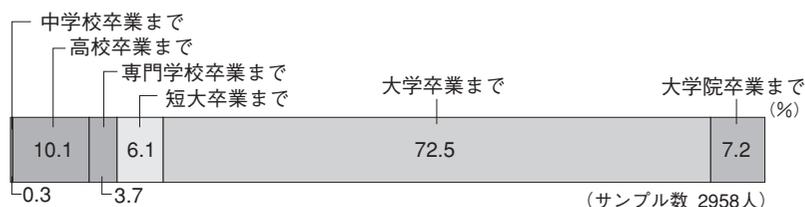
●子どもの性別・父親の学歴による差

性別でみた結果は図2-2-8である。大学卒業以上（「大学卒業まで」＋「大学院卒業まで」、以下同様）の比率をみると、男子を

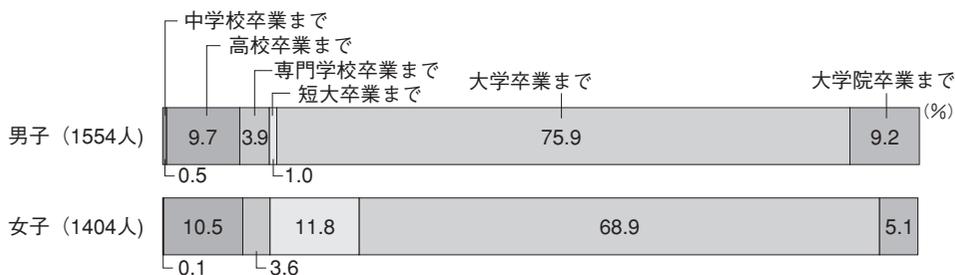
持つ父親は85.1%に対して、女子を持つ父親は74.0%で、両者の間の差は11.1ポイントである。子どもの性の違いによって、父親の学歴期待が異なっていることがわかる。

次に、父親自身の学歴によって、子どもへの学歴期待に差があるかを分析してみたい（図2-2-9）。子どもに大学卒業以上の学歴を望む比率をみると、大学・大学院を卒業した父親は90.2%である。一方、中学校・高等学校・専門・専修学校・短期大学（図2-2-9では、項目は略記している）を卒業した父親は62.7%である。両者の間に、27.5ポイントの差がある。父親自身の学歴の違いによって、子どもへの学歴期待が異なる。

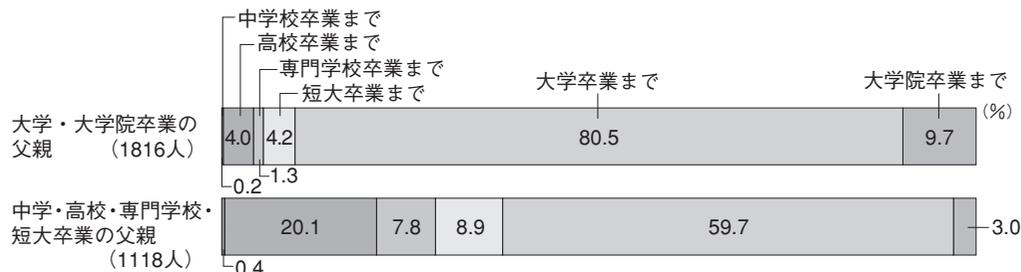
■図2-2-7 子どもへの学歴期待



■図2-2-8 子どもへの学歴期待（子どもの性別）



■図2-2-9 子どもへの学歴期待（父親の学歴別）



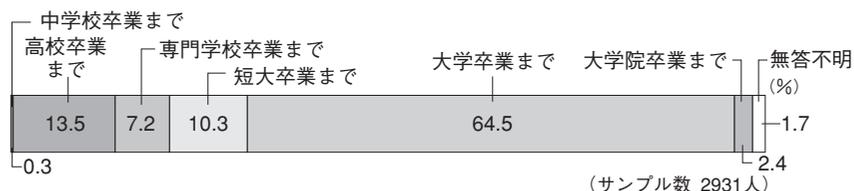
●父親と母親による子どもへの 学歴期待の差

子どもへの学歴期待は親の性別による違いがあるのかについて分析を行いたい。ここでは、「第3回幼児の生活アンケート・国内調査」(Benesse教育研究開発センター、2005年実施)から母親のデータを取り上げてみた。本調査と調査方法が異なるため、比較ではなく、傾向をつかむための参考データである。

まず、母親の子どもへの学歴期待をみると、大学卒業以上の学歴を望む比率は66.9%である(図2-2-10)。前述した父親の79.7%(図2-2-7)との間には、12.8ポイントの差がある。母親より父親のほうが子どもへの学歴期待が高いことがわかる。

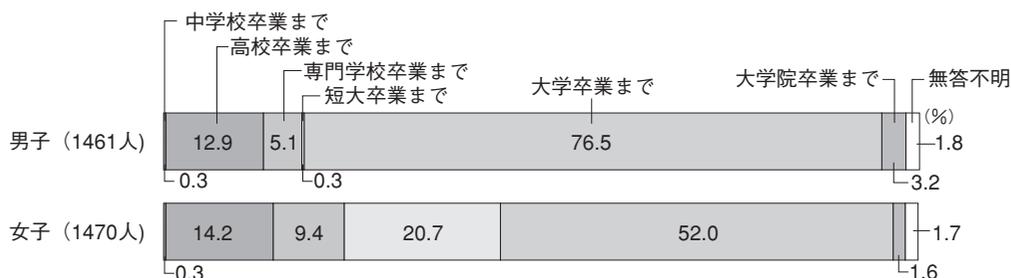
次に、子どもの性の違いによって、父親と母親の学歴期待が異なるのかを検討したい。図2-2-11は子どもの性別にみた母親の学歴期待の結果である。大学卒業以上の比率をみると、女子より男子のほうが高く、26.1ポイントの差がある(男子79.7%>女子は53.6%)。父親については、前述したとおり、子どもの性の違いによって、父親の学歴期待が異なっている。女子より男子への学歴期待が高いことは父親も母親も同様である。しかし、子どもの性別による学歴期待の差をみると、父親は11.1ポイントに対して、母親は26.1ポイントである。子どもへの学歴期待については、父親は母親ほどジェンダー意識が強くないと思われる。

■図2-2-10 子どもへの学歴期待(「第3回幼児の生活アンケート・国内調査」母親の回答)



注) 首都圏に居住している0歳6か月から6歳就学前の乳幼児を持つ母親の回答を分析。

■図2-2-11 子どもへの学歴期待(子どもの性別「第3回幼児の生活アンケート・国内調査」母親の回答)



注) 首都圏に居住している0歳6か月から6歳就学前の乳幼児を持つ母親の回答を分析。

第3節

家族に対する 父親としてのスタンス

性別役割分業を肯定する意識が強いという父親は約3割、男らしく・女らしくといった意識が強いという父親は約半数にのぼる。「自分は我が家で人気者だと思う」を6割が肯定するなど、父親としての存在感を保っていると感じている者が多いが、疎外感を持つ者も1割前後存在している。

●父親のジェンダー観

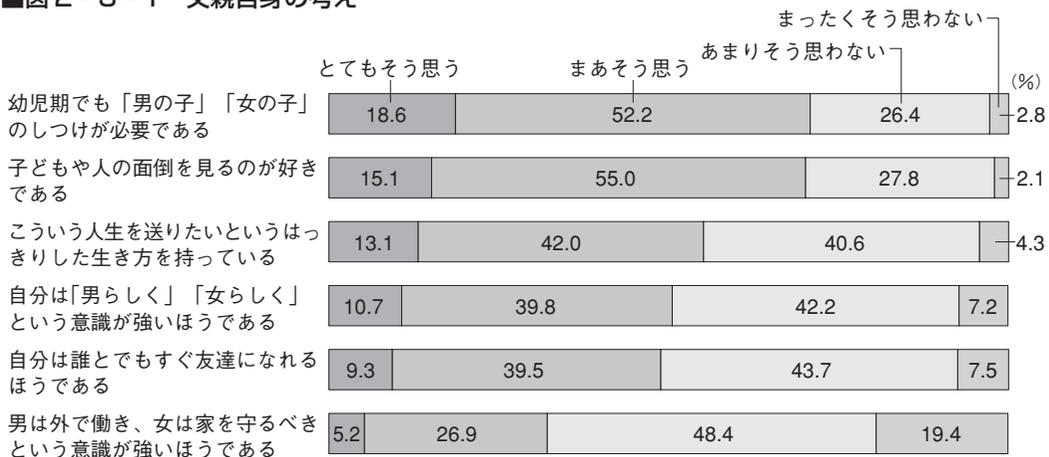
・ジェンダー観の実態

最初に、自分の性格やタイプ、ジェンダー観（性別役割観）についてたずねた項目について検討しよう。そのなかでもとくに、父親たちが、「男らしさ」や「女らしさ」といった性別役割に対してどのような意識を持っているのか、その意識が実際の子育てにどう影響しているのかという点に注目して分析を行うことにする。

図2-3-1は、6つの質問項目に対する父親自身の考えを示している。ジェンダー観にかかわる3項目について「そう思う」（「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計、以

下同様）の比率をみると、「幼児期でも『男の子』『女の子』のしつけが必要である」70.8%、「自分は『男らしく』『女らしく』という意識が強いほうである」50.5%、「男は外で働き、女は家を守るべきという意識が強いほうである」32.1%となっている。夫婦の性別役割分業の意識が強いほうだと感じている者は3割程度である。さらに、男らしく・女らしくといった意識が強いと感じているものは約半数である。この2つの項目は、性別による分業の賛否を直接たずねた質問ではなく、他者と比べて相対的に強く意識していると思うかどうかをたずねている。そのため、肯定率が著しく高いという結果にはなっていないが、子育てにおいて男の子と女の子のしつけ

■図2-3-1 父親自身の考え



(サンプル数 2958人)

が異なるという意見を肯定する父親は、7割に達していることを考えると、こうした分業意識を持っている父親の実際の割合は表れた数値よりも高いものと推察される。

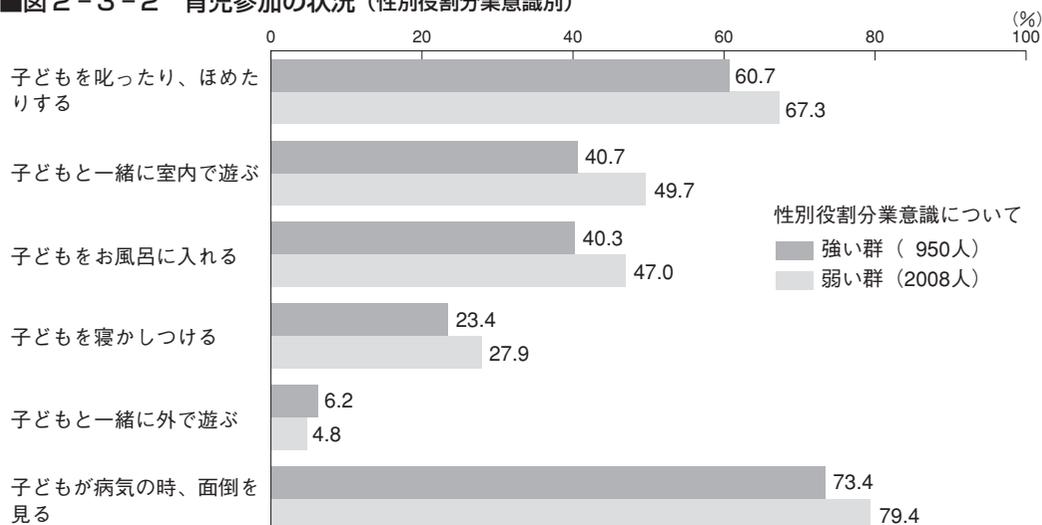
ところで、このような性別役割や性によるしつけの違いに対する意識について、父親の年代によってどのような違いがあるのかをみたところ、年代による違いはほとんどみられなかった。たとえば、「幼児期でも『男の子』『女の子』のしつけが必要である」を肯定する比率は、「20代」68.6%、「30代」71.0%、「40代」71.5%となっており、大きな差がない。こうした意識についてわずかに差がみられた属性は「本人の学歴」であり、男女別のしつけに対する肯定率は、「高等学校」75.3%、「専門・専修学校」73.5%、「大学」69.9%、「大学院」61.4%と学歴が高い者ほど低い結果になっている。こうした傾向からは、本人の受けた教育による背景の違いが及ぼす影響が大きい可能性を示唆する。

・分業意識が強い父親・弱い父親

それでは、このような性別役割に対する意識は、実際の子育てとどのような関係があるのだろうか。ここでは、「男は外で働き、女は家を守るべき」という意識が強いほうである」という項目を用いて、「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した者を性別役割分業意識が「強い群」、「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」と回答した者を「弱い群」として、育児参加の状況の違いをみた。

図2-3-2は、育児参加の状況について「ほとんど毎日する」と「週に3-5回する」を合計した比率（1項目のみ例外、注参照）を示している。これをみると、分業意識の「強い群」に、比率が低い項目が多い。分業意識が強いと、育児を母親に任せるためか、子どもとのかかわりが少なくなる様子が見える。一方、分業意識が弱い父親は、相対的にみて積極的に育児に参加する傾向があるようだ。

■図2-3-2 育児参加の状況（性別役割分業意識別）



注1) 数値は、「ほとんど毎日する」と「週に3-5回する」の合計。ただし、「子どもが病気の時、面倒を見る」は、「いつもする」と「ときどきする」の合計。

注2) 性別役割分業意識について、「強い群」は「男は外で働き、女は家を守るべき」という意識が強いほうである」に「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した人、「弱い群」は「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」と回答した人を示す。

● 家族の中での父親の存在感

・ 家族の中での存在感に対する意識

ここでは、家族の中での父親の存在感についてたずねた結果をみてみよう。図2-3-3は、「そう思う」（「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計、以下同様）という回答の多い順に項目を並べている。これをみると、「一家の方針を決定する中心は、自分であると思う」は7割、「自分は我が家で人気者だと思う」は6割が肯定しており、全体として父親としての存在感を保っていると感じている者が多いようである。しかし、「家にいるとひとりぼっちのような気がすることがある」といった孤立感や、「家族が一緒にいても、妻と子どもの話の輪に入っていけないことが多い」といった疎外感を感じる父親も1割前後の割合で存在していることがわかる。

それでは、このような存在感の有無は、どのような要因と関連しているのだろうか。子どもへのかかわり方の違いによって、存在感

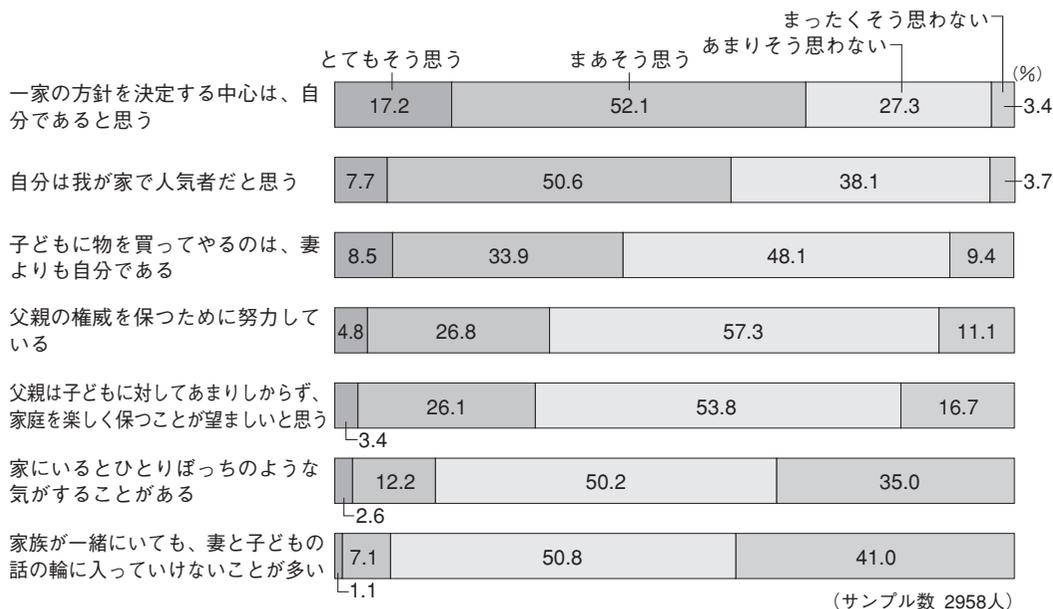
に対する意識は変わるのだろうか。

・ 育児参加の状況との関連

最初に、子どもと一緒に過ごす時間をみたところ、時間が短い父親は、わずかに孤立感や疎外感を感じる者が多かった。たとえば、平日の子どもとのかかわりが「2時間未満」の父親と「2時間以上」の父親を比べると、「家にいるとひとりぼっちのような気がすることがある」（「2時間未満」16.5%＞「2時間以上」12.0%）、「家族が一緒にいても、妻と子どもの話の輪に入っていけないことが多い」（9.7%＞5.5%）のいずれの項目でも、かかわりが少ない父親のほうが数値が高い。とはいえ、平日過ごす時間、休日過ごす時間ともに、明確な関連がみられたと言えるほど差は大きくなく、単に、子どもとかわる時間の長さが父親の存在感を規定しているわけではないようである。

それでは、育児参加の状況との関連はどうだろうか。育児参加の状況については、「子

■ 図2-3-3 家族の中での父親の存在感



子どもと一緒に外で遊ぶ」「子どもと一緒に室内で遊ぶ」「子どもをお風呂に入れる」「子どもを叱ったり、ほめたりする」「子どもを寝かしつける」「子どもが病気の時、面倒を見る」の6項目に対する回答を得点化して尺度を作り、各群がほぼ3分の1ずつになるように育児参加「低群」「中群」「高群」を設定した。図2-3-4は、こうして作成した変数と父親の存在感に関連する項目の関連をみたものである。

これによると、「一家の方針を決定する中心は、自分であると思う」や「父親の権威を保つために努力している」といった“一家の大黒柱”としての父親像については、育児参加の程度とは関連がみられない。それに対して、「自分は我が家で人気者だと思う」には

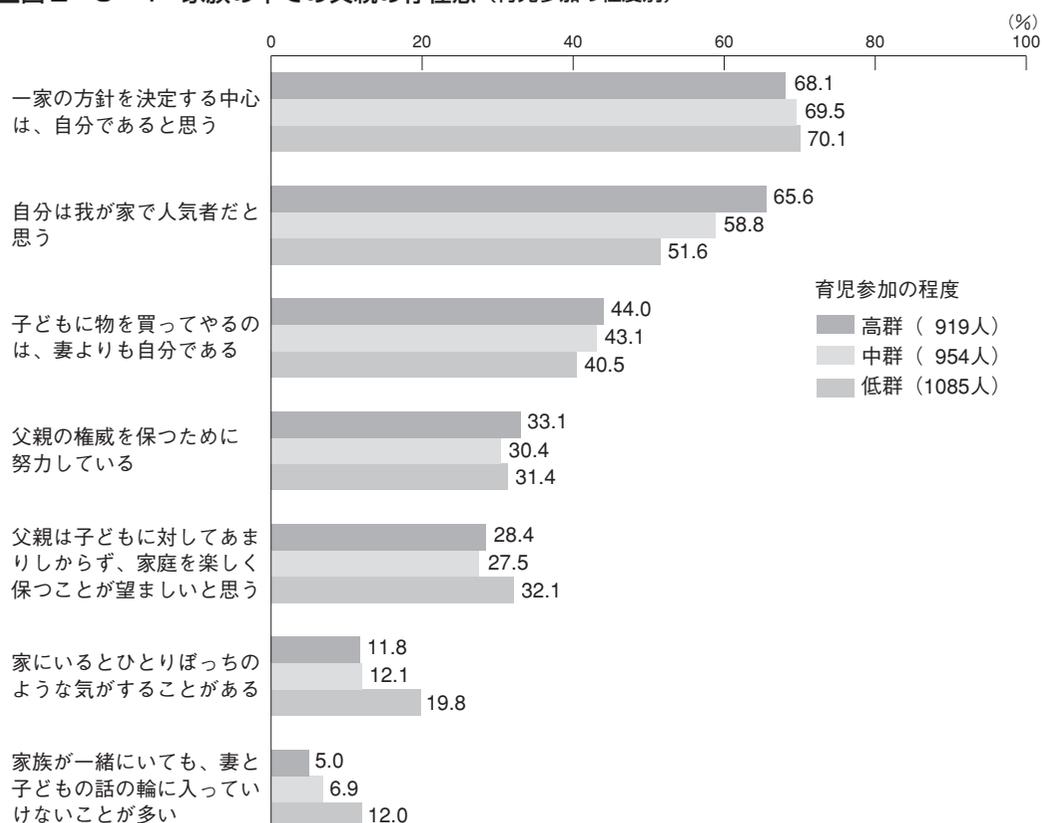
明確な差がみられた（「高群」65.6%＞「中群」58.8%＞「低群」51.6%）。さまざまな場面で育児に参加することによって、子どもや妻との親密度が増し、自分は人気者であるという意識が高まる様子が見える。

● 周囲の人との関係

・精神的な絆を結ぶ人

ここでは、誰と精神的な絆を強く結んでいるかについて父親にたずねた結果をみていこう。質問では、「一緒にいて楽しい人は」「安心して一緒にいることができる人は」など精神的な絆を結んでいる相手について8項目を設定し、「妻」「子ども」「友人」などの中から最もあてはまる相手を1人だけ選んでもら

■ 図2-3-4 家族の中での父親の存在感（育児参加の程度別）



注1) 「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計。

注2) 育児参加の程度については、子どもとのかかわりに関する6項目を得点化し、各群がおよそ3分の1ずつになるように設定した。

った。図2-3-5は、その結果である（「仕事の仲間」「自分の父親」「自分の母親」「その他」はいずれの項目でも回答が少なかったため、図では「それ以外」としてまとめて示した。詳細の数値については基礎集計表を参照されたい）。

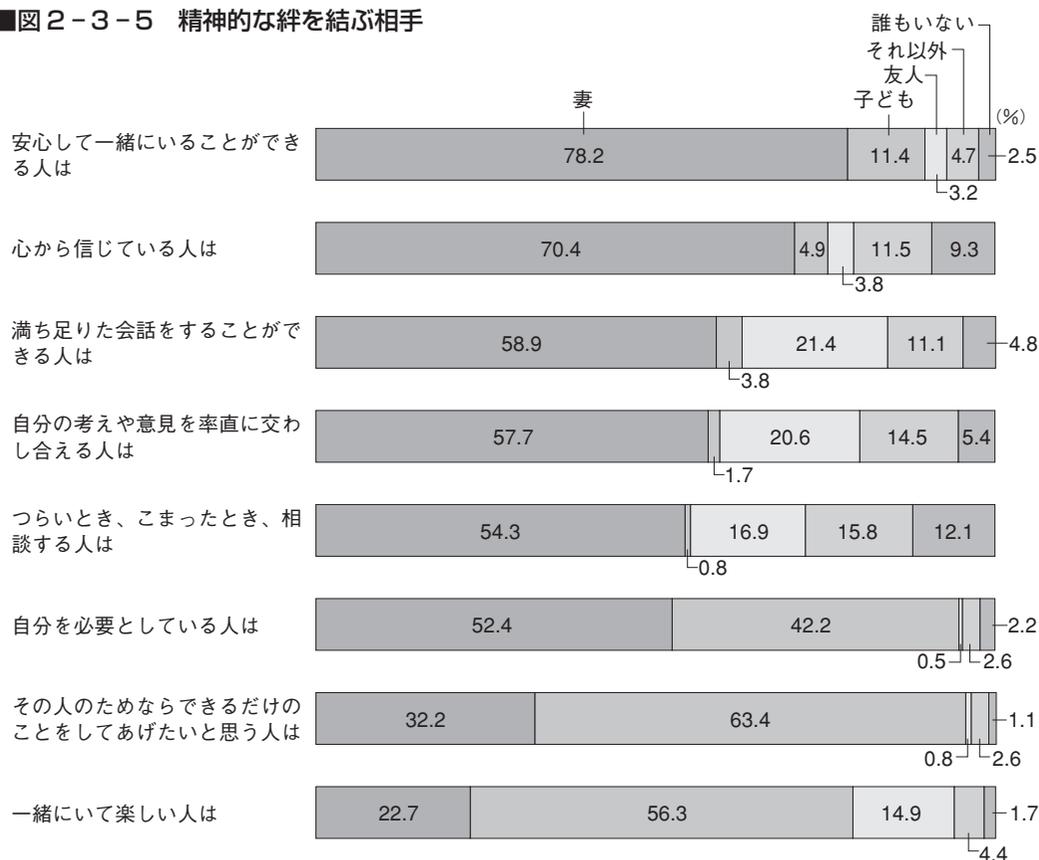
「安心して一緒にいることができる人は」と「心から信じている人は」の2項目は、いずれも「妻」を選択する者が7割を超えている。安心や信頼といった精神的なつながりが存在する夫婦が多いようである。「満ち足りた会話をすることができる人は」「自分の考えや意見を率直に交わし合える人は」の2項目でも、6割弱が「妻」を最もあてはまる相手として選んでおり、会話や意見交換でも活発にやり取りをしている様子である。ただし、

この項目では「友人」を選択する者も2割いる。

「自分を必要としている人は」については、「妻」52.4%、「子ども」42.2%と意見が分かれる。しかし、「その人のためならできるだけのことをしてあげたいと思う人は」と「一緒にいて楽しい人は」の2項目では、6割前後が「子ども」を最もあてはまる相手として選択していて、「妻」の比率は低くなる。

全体的にみると、妻とは心から信じあい、満ち足りた会話を交わし、率直に意見交換をするといったパートナーとしての関係性が強く表れているようである。これに対して、子どもには、できるだけのことをしてあげたいといった献身的な愛情が強く表れている。

■図2-3-5 精神的な絆を結ぶ相手



注)「それ以外」は、「仕事の仲間」「自分の父親」「自分の母親」「その他」の合計。

(サンプル数 2958人)

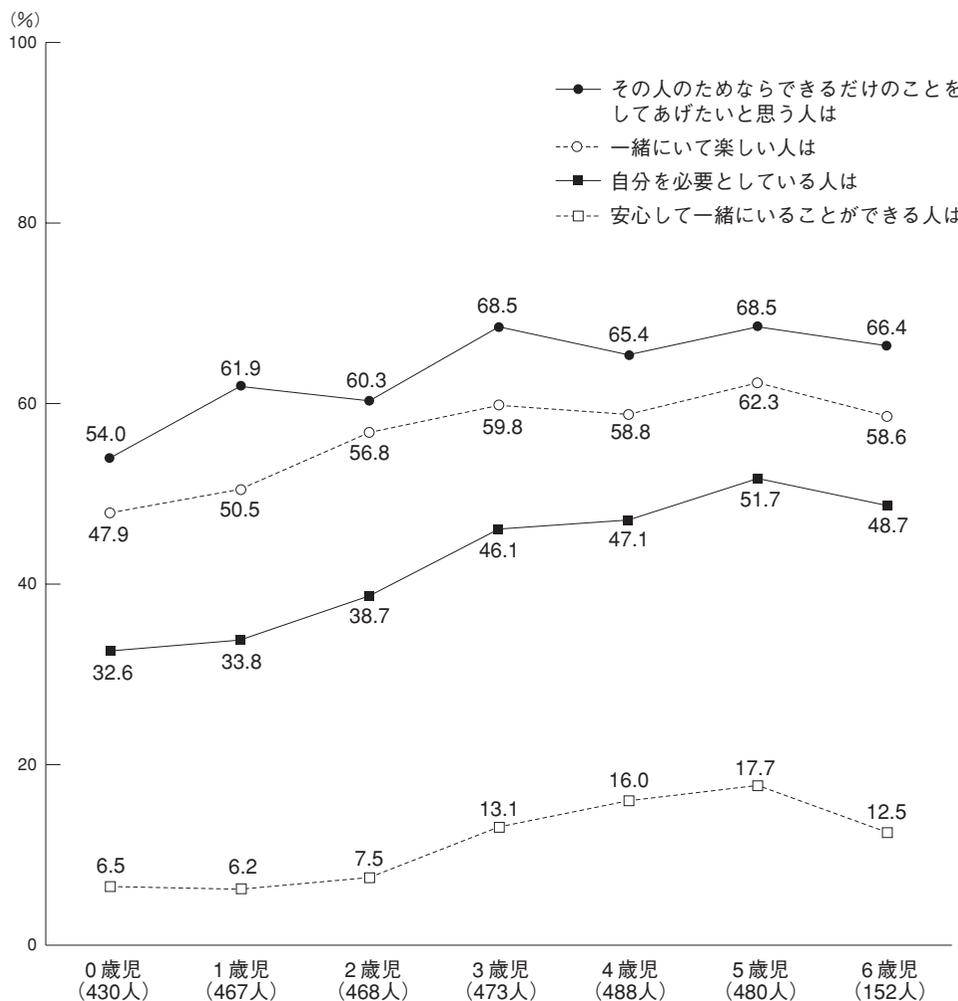
・子どもの発達による関係の変化

それでは、こうした関係性は、子どもの発達とともにどのように変化するのだろうか。図2-3-6は、変化が大きい項目について「子ども」を選択した比率を、子どもの年齢別に示したものである。これをみると、「その人のためならできるだけのことをしてあげたいと思う人は」「一緒にいて楽しい人は」の

2項目は、0歳児から3歳児にかけて増加し、3歳児以降は高い水準で横ばいになる。また、「自分を必要としている人は」「安心して一緒にいることができる人は」の2項目は、0歳児から5歳児にかけて増加する。このように、子どもの発達とともに愛着が深まる様子がみとれる。

ただし、上記の4項目はいずれも単一回答

■図2-3-6 精神的な絆を結ぶ相手（子どもの年齢別）



注1) 数値は、「子ども」を選択した割合。

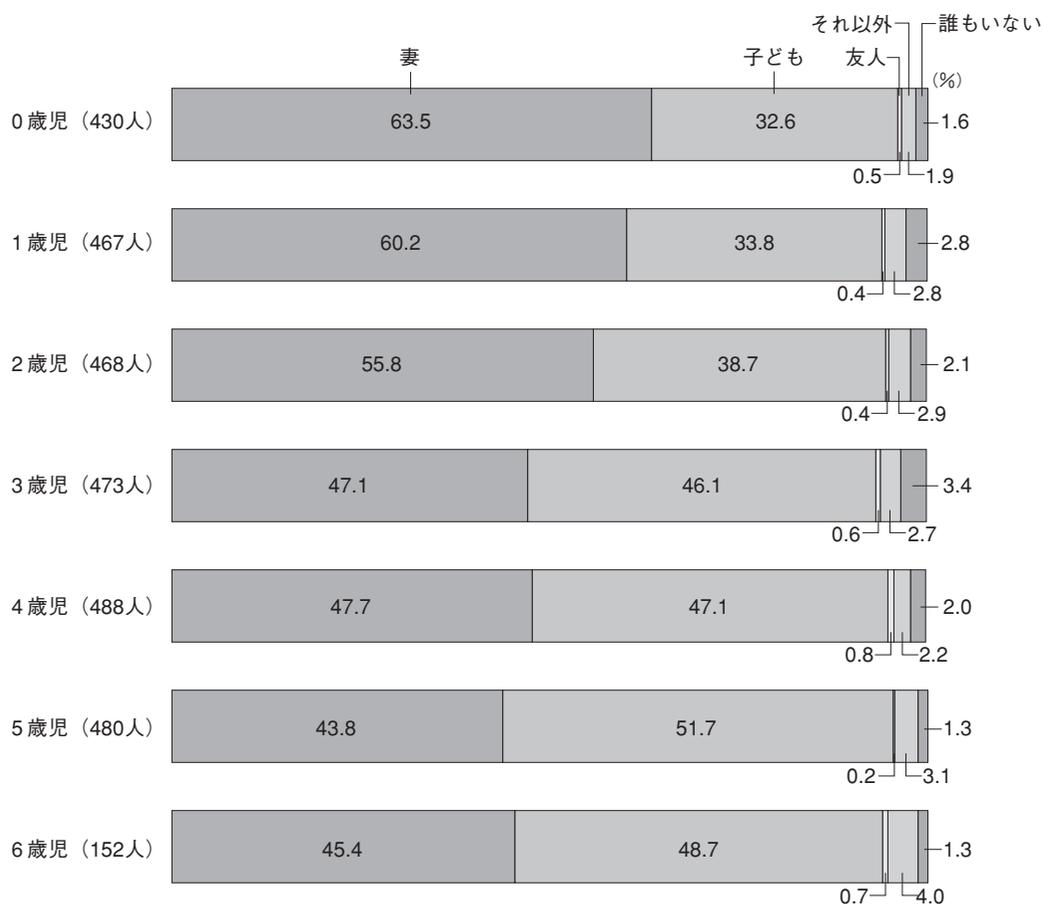
注2) 8項目中4項目を図示。

であるため、「子ども」の比率の増加とともに、「妻」の比率が減少する。たとえば、「自分を必要としている人は」に対する回答を年齢別にみると、図2-3-7のように変化する。したがって、子どもの発達とともに変化するものは、子どもとの関係性だけでなく、妻との関係性の可能性もある。

また、子どもが小さいうちは妻に対する支

援が中心であり、子どもに対しては妻を介して間接的に援助するが、成長にともない子どもを直接的に援助するようになるというように、自分-妻-子どもの三者の関係性が変化することも考えられる。いずれにせよ、父親から見たときの家族内の関係は、子どもの発達とともに変化する事がわかる。

■図2-3-7 自分を必要としている人（子どもの年齢別）



注)「それ以外」は、「仕事の仲間」「自分の父親」「自分の母親」「その他」の合計。